

こども図書館

2017年1月 Vol.64 No.1 (2017年1月10日発行)
〒105-0004 東京都港区新橋5-9-4 関ビル3階

TEL/FAX (03) 3431-3478

児童図書館研究会 振替口座 00180-8-143687
<http://www.jitoken.com/>

もくじ

特集・出版社のトピックス	3
紙芝居文化の会の15年を ふりかえって	17
クリッピング	19
選挙公示・2017年度研究助成について 運営委員会報告	20

子どもの本という希望の灯
リオオリンピックに沸く8月18日から21日、国際児童図書評議会（IBBY）世界大会が、ニュージーランドのオークランドで開催されました。
IBBYは、危機や困難の中にある子どもたちに、心の栄養である子どもの本を届けることを根幹の活動としている団体です。今大会でも、最も困難の中で生きているであろうと想像されるシリア難民の子どもたちの支援をしているレバノンの方は、「子どもたちはおなかをすかして荒れ狂っている。私たちはまず食事を与えなければならぬけれど、そんな子どもたちも、私たちの本の活動の中で、少しは気持ちを落ち着かせる時をもつてくれる」、パレスチナの方は「私たちの国の子どもたちは、ものすごい状況の中で生きています。でも本は子どもたちの教育と心の発達に必要不可欠なのですから、あきらめません」と、子どもたちの現状や本での支援の必要性を心から訴えておられました（注1）。

JBBYは、放射線被害ということを中心にどこかに持ちながら、子育てをする親子の不安・ストレスへの、子どもの本での支援の可能性を野馬追

ひろば

子どもの本でよりよい隊

野馬追文庫という支援

日本国際児童図書評議会（JBYY）

かくあげ
久子



野馬追文庫

原書：乾千恵
デザイン：デザインン
グマール（福島市）

文庫という活動の紹介とともに報告いたしました。ニュージーランドは日本と同じ地震国ではあっても、原子力発電は持たない国です。原発事故を起こし、子どもたちを放射線被害に直面させた日本という国を世界の人たちはどう見るのか、大きな不安が私にはありました。けれど、子どもの本の力を信じる者には、通じ合う特別な言葉と、受け止める心の場所があるようです。子どもの本の力を信じて、何ができるのか模索したいという私たちの思いを、受け止めてくれた仲間たちでした。子どもの本は思いをつなぎ、希望を支えあうのだ、その強い実感をニュージーランド大会から持ち帰りました。

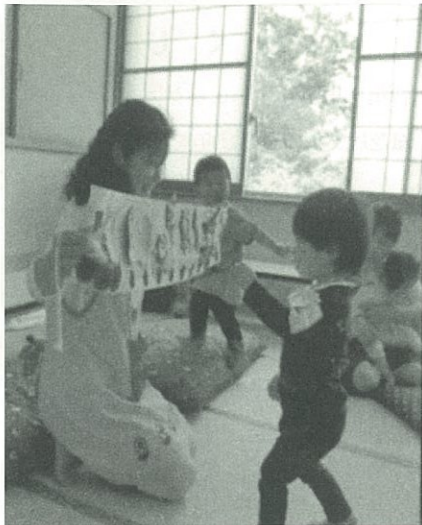
野馬追文庫という支援

2011年8月からはじめた、南相馬市への子ども本を通しての支援を「野馬追文庫」と呼んでいます。震災が起きた直後から、チルドレン・イン・クライシス支援を根幹理念とするJBYYにとつて、子どもの本を通じた支援に動くことは使命で、すぐに他の本の団体と一緒に（注2）子どもたちへあしたの本プロジェクト」を結成し

動きました。

このプロジェクトは、2016年3月をもって活動を閉じ、各々の団体がその後の活動は引き継ぎましたので、現在、野馬追文庫はJBBYチルドレン・イン・クライシスの中で継続しております。私は障害のある子どもたちの本の活動をしており、震災直後に思いをはせたのも、被災地の障害のある子どもたちのことでした。被災地には、たくさんの方が贈られても、障害のある子どもたちのところには届きにくいだろうと思い、〈だいたいようぶだよセツト〉という手作りの布絵本など遊具性の高い絵本などを、相手の要望とマッチングさせながらお送りしました。

この本の届け方をキャッチして、震災直後、南相馬で当時まだ閉鎖されていた図書館や福祉施設で読み聞かせをしていた元図書館員の方から、一度にたくさんでなくていいから、継続した子どもへの援助を…という要請が、墨田区ひきふね図書館の山内薫さんを通して入ってきました。当時の南相馬市民のもつ、国からの見捨てられ感が、「忘れない」という気持ちを届ける支援を考え出していったのです。そこで、2011年8月から南相馬市の子どもたちの生



南相馬市ちゅうりっぷ文庫の梶田さん
野馬追文庫の本を子どもたちに
選書のお手伝いも

活を見守り、震災が起きた日と同じ11日に毎月子どもへの本を届ける野馬追文庫という支援を開始しました。野馬追というのは、



南相馬市 かのん（障害児支援施設）野馬追文庫の本をご活用いただいています

仮設集会所に送っていた時は、年配者も多く、子どもの中にも世代を超えて楽しめるような本を選びました。現在は、小さいお子さんを育てているお母さんたちにとっても懐かしい絵本などを多く選書しております。毎月の選書は、福島県の2人の図書館員と、山内薫さん、そして地元文庫の梶田千賀子さんにもお手伝いをお願いしています。私自身は図書館員ではないだけに、児童図書への選書に対する真摯な姿勢や、選書でよい本に出合っていたら、南相馬の図書館に足を運んでくれるようになってほしいという、図書館員の被災地支援の姿勢を、いつも野馬追文

庫の背中に感じておりました。選書をしていただいている図書館員の一人、本宮市立しらすわ夢図書館の柳沼志津子さんは、震災後福島で出産され、福島で子育てをしながら、今この子たちが喜ぶ本、今読んでほしい本をご提案くださいます。しらすわ夢図書館でも積極的に様々な展示会を企画なさったり、絵本の読みあいを取り入れた講座を開かれたり、本の力でご自身も震災を乗り越えていかれています。もうお一人、福島県立図書館の鈴木史穂さんは、原発事故で閉館せざるを得なかった図書館員の無念さを胸に、さらにご自身も本に支えられてきたことを、次のように選書の中で語ってくださいました。震災後の新聞で、うさこちゃん泣いている絵を見たとき、私は泣きたかったのだ、と気づきました。気づいた時には泣いていました。うまく言えませんが、うさこちゃんは、私だ”と思いました。うさこちゃん、マドレーヌ、マックス、どろんこごぼた、『ラチとらいおん』のらいおん、この年になっても、気がつく私を支えてくれているものが、絵本のなかにあります。「子どもの本のむこうとこちらで、不条理な困難に立ち向かういのちが響きあっています。」

注1 今大会で「JBBYからの行動の呼びかけ」の声明が発表された。JBBYのホームページからご覧ください。

http://www.jbby.org/ [What's New?] 11月1日の記事です

注2 日本出版クラブ、出版文化産業振興財団、日本ペンクラブ

注3 この支援活動は高知こどもの図書館、ジネット（お茶の水女子大学児童学科・発達心理学講座/発達臨床心理学講座同窓会）をはじめ、多くの皆さんからのご協力をいただいております。

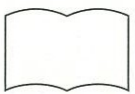
地域の伝統的なお祭り『相馬野馬追』からとった名前です。8月というのは、ちょうど避難所から仮設住宅ができて移っていった時期で、仮設の集会所に本を届けることにしました。12か所から集会所は最大数36か所になりました。2014年8月、野馬追文庫4年目からは集会所にも本が増えましたので、本のニーズがある、子育て支援、障害児支援の場所に本を届けております。南相馬で育つ子どもたちを支えて頑張っている人たちに、子どもの本で寄りそいたいと思っています（注3）。

選書の様子

仮設集会所に送っていた時は、年配者も多く、子どもの中にも世代を超えて楽しめるような本を選びました。現在は、小さいお子さんを育てているお母さんたちにとっても懐かしい絵本などを多く選書しております。毎月の選書は、福島県の2人の図書館員と、山内薫さん、そして地元文庫の梶田千賀子さんにもお手伝いをお願いしています。私自身は図書館員ではないだけに、児童図書への選書に対する真摯な姿勢や、選書でよい本に出合っていたら、南相馬の図書館に足を運んでくれるようになってほしいという、図書館員の被災地支援の姿勢を、いつも野馬追文

特集 出版社のトピックス

あたらしい年を迎えました。今年も、たくさん素敵な本と出合えることを願って、新年最初の特集は、児童書出版社の方に、ご寄稿をいただきました。



こぐま社50周年
絵本と子どもとお話と
私たちが大切にしていること

こぐま社編集部 関谷 裕子

■はじまりの頃

50年前のある春の日に、こぐま社は、港区高樹町のマンションの一室で、産声を上げました。いまは相談役となった佐藤英和を中心に、のちに「こぐまちゃんえほん」シリーズの著者となる森比左志さん、和田義臣さんというブレインを支えられてのささやかな船出でした。

半世紀という月日は、小さな出版社にとって決して短いものでも平坦なものでもありませんでした。そこで、この節目の年に、私たちがいままで何を大事にしてきたのかを、少し振り返ってみてみたいと思います。